

キプシギスの双子と名付け

小馬 徹

名付けられぬ者

名付ける事はその対象を存在させることであり、殺す事の対極をなす。双子に特殊な名付けをする社会は、双子の社会性を否定的に見るとしても双子を抹殺せず、双子の生存を前提として文化的な対処を試みる社会である。前回の趣旨を要約すると、このようになろう。

これまで、主にそうしたタイプの社会に焦点を当てて、双子の文化複合を見てきた。それでは、逆に、双子（の両方または一方）を積極的にであれ消極的にであれ死に至らしめる社会では、双子の名付けはどうなるのだろうか。存在しない者に名前を与えないのが文化の一般則だとすれば、このタイプの社会の事情が容易に記録に残らないのは無理もない。

そこで、私自身が1979年以来参与調査を続けている南西ケニアのキプシギスの人々を例に、この問題を考えてみたい。そして、双子の名付けをキプシギス社会の命名慣行の全体的な脈絡で考察し、幾分の検討を加えてみよう。

犬のように産む

社会人類学者ペリスチャーニは、「犬のように二人以上の子供を産むのは、女にとって喜ばしいことではない。でも双子は我々の子だ。どうして疎ましいわけがあらう」という、キプシギス人の言葉を書き留めている〔Peristiany, J. G., *The Social Institutions of Kipsigis*, 1939〕。ただし、双子を消極的にでも容認するこうした態度は、彼が調査した1930年代、つまり植民地化後30年ほどを経た時代のものである。それ以前には、双子の出産は一層強く忌まれ、双子の出産を反復した母親は、「“不自然な振る舞いをする”（Sogor-ge）に至った存在」（sogornotet）という烙印を押された。宗教的な罪を犯した人間や、屋根に飛び上がったたり女

性の乳房を吸うなど本性を逸脱した行為をした家畜がこれに当たる。そうした家畜は時を移さずに殺し、その死体は遺棄したのである。

双子は育たないというのが、キプシギスの旧来の見方だった。V. ターナーは、食料の乏しい社会では双子の養育が「社会の負担」になるとし、特に家畜を飼養しない社会の場合はそうだと述べた〔Turner, V., *The Ritual Process*, 1969〕。だが、牛牧民であるキプシギスでも牛乳は天の配剤ではなかった。赤ん坊は、家畜の乳ではなく、あくまでも人間の胸乳で養育すべしとされたからだ。ついでながら、つい最近まで、キプシギスの男性が妻の乳房に触れたり吸ったりすれば裁判沙汰になり、離婚の根拠にさえなりえた。乳房と母乳は、あくまでも育児の器官と観念されたのだ。性と年齢による範疇と場所や機会によって振る舞いが細かく様式化・規範化されて融通性をもたないのは、小規模な伝統社会の通例である——ターナーは、やや環境決定論的に単純化していたといえよう。

いずれにせよ、キプシギスはかつて双子の一方または両方を牛囲いの入口に置き去りにして、蹄に掛かるに任せたのである。

双子と「友達の木」

人間の双子（simotonik、複数形のみ）は、半寄生性の無花果（simotwet）と深い連想関係をもつ。次のような話が知られている。

半寄生性無花果の種は、他の木の上に居場所を借りないと生きていけない。そこで、オリーブの木に頼る事にした。気のいいオリーブの木は、造作もないといって引き受けた。無花果はオリーブの梢から根を下ろし始め、やがて地面に根を張ると、徐々にオリーブを締め付けて、ついには枯らしてしまった。

いわゆる「絞め殺しの木」である。宿主を

チョルウェット (*chorwet*) の木とする異版もよく耳にする。チョルウェットの語の第一義は、友達・伴侶である。実は、チョルウェットを宿主とする版が本来のもので、その含意は双子の育ちにくさと、育つ時にも一方が他方を犠牲にする不吉さなのだと老人たちは語った。

逆子など、異常な生まれ方をした赤ん坊に生後間もなく施す清めの儀礼がある。この時、双子に対しては小安貝を縫い付けた半寄生性無花果の木の皮を用いる。*saramek* と別の語で呼ばれる家畜の双子も、同様の儀礼を受ける。この事実からも、双子と半寄生性無花果の強い連想関係が窺えよう。

双子の腕輪

双子の赤ん坊には、印として「白い」鉄製の振じれた首輪をさせ、長じると右手首の腕輪に代えた。これらの名称 (*samoiyot*) は虎斑模様 (*samoi*) に因むが、それは宿主の木の幹に巻きついて食い込む件の無花果の根を象徴した。

キプシギスには、他にも、双子の腕輪に対比できる別の腕輪をする特殊な範疇の人々がいた。兄弟姉妹が続けて夭逝した後に生まれた子供や、兄弟 (姉妹) ばかりの後に生まれた女 (男) の子は、耳たぶに特別の傷 (*tegeret*) を付けられ、「印付きの者」(*tegeriyot*) と呼ばれる——第5回参照。かつて、彼らは真鍮の腕輪を右手首に装着した。また、「黒い」鉄製の腕輪を右手首に付けた者もいた。これは、加入礼期間に不注意にも手首を露出していて、子のないまま閉経した老女にこの腕輪を嵌められて養取されてしまった者だ。外婚的父系氏族の連合体であるキプシギスでは民族内部での養取は本来不可能で、これはごく稀な例外だった。この「黒い」鉄の腕輪にはヤモリを模した模様が付けられたが、結婚式を行っている家の天井からヤモリが落ちて来ると結婚は御破算になった。「黒い」鉄製の腕輪は、子のない老女が父系氏族の婚姻関係による政治同盟という民族社会の構造化の原則に悖る存在である事を象徴していたのだ。

双子は「印付きの者」ではないが、印付けられた者ではあった。双子が生まれた家は、幹が二つ (以上) に別れる或る種のヤシ (*lebekwet*) を植えて印とし、その事実を公示した。

双子の名前、三つ子の名前

印付きの者は、生後間もなく長生を祈る儀礼を施され、儀礼の各変移型に因んで各々特殊な名前を与えられた。彼らは、家族の永続のためになくってはならない者として、その生存が宗教的・社会的に希求されたのだ。一方、双子には全く特別な名前がない。植民地化後、生き延びる双子も出てきたが、その子供にはごく普通の名前を与えたのである。ただ、双子で (*Simotwo*) という名前の人がごく稀にいる。赤ん坊に再来した祖霊が双子の一方だった場合、それに因む渾名としてこの名を与える場合がある。

一方、三つ子の第三子には特殊な名前があった。私が一時寄宿した家の主がその例で、彼の幼名は「人ならず」(*Mochi*) だった。これは、「印付きの者」に与える特殊な名前の異版の一つである。そして、双子がかつて不吉なものとして死ぬに任された事実を証している。三つ子の上二人は不吉な双子として、一方三番目の赤ん坊は印付きの者として扱われたのだ。この処置によって三つ子の一人の長生を確保しようとしたわけである。ここに、双子と三つ子の名付けの重なりと差異の由来がある。

それでも、三つ子の末子は生き延びる事が極めて稀で、往々子のない老女の養子とされた。これもまた極めて例外的な措置である。老女は、ハイエナの鳴き声を真似つつやって来て、赤ん坊を連れ去った。母親が赤ん坊をハイエナの出そうな道端に一旦捨てて老女に拾わせ、その老女からまるで他人の赤ん坊であるかのようにして受け取る、「印付けの者」の捨て子儀礼の例外的な異版である。「人ならず」もまたれっきとした名前であり、殺す事の対極をなしている。

(こんま とおる 神奈川大学社会人類学)